

李起昇

講談社

ザ・ロ ばん

喝

李起昇

講談社

ゼロはん

一九八五年九月二〇日 第一刷発行

著者——李^イ起^キ昇^{スン}

© Lee Ki-Seung 1985, Printed in Japan.

発行者——野間惟道

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——二二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-202276-1(0) (文1)

ぜ
ろ
は
ん

装幀——平野甲賀

（掲載誌「群像」昭和六十年六月号）

大きな雨粒だった。雨雲はぶ厚く、低く垂れ込めている。辺りは薄暗かったが、目の前の低い山の緑だけが、照明でも受けているかのように明るい。しかし裏の山になるともうくすんでいて、黒い影となっている。

遠くにブルー・グレーの関門橋が、雨煙にけぶっている。流れの速い海峡も今はただ澱んでいる。

音がしなかった。

貨物船も小型のタンカーも、殆ど波を上げずに進んでいる。さき程、関門橋の下から瀬戸内海へと入って行った船は、今では霧に消されて解らない。九州の山も本州の山も、同じく

その辺りから雨雲に覆われて見えなくなっている。

目の下の海面は濃い緑色をしている。岸壁には雨水がぶ厚く溜っていて、無数の波紋が目まぐるしく動いている。ターミナルビルから、ジープが飛び出して来る。モーターボートのように水煙を跳ね上げて来るが、音が届かないためにおもちゃのように見える。フェリーの真下へ来るとカーキ色のジャンパーを着た運転手は、腕で頭を覆って飛び降りる。タラップの下で待っていたらしい、原色の上っ張りを着た数人が、雨の中へ現れた。段ボールの荷物を受け取ると、駆け上って来る。

目鼻の見分けがつく辺りまで来て、やっと皮靴が鉄板を踏む音が聞こえた。それで、雨の音とフェリーのエンジンの音とで何も聞こえなかったのだと知った。肩に荷物を乗せたおばさんが、下唇を噛み締め、必死の面持ちで船室に入っていく。朝鮮人の顔だ、と思う。首に筋を浮かせたおじさんが、荷にふらつきながら雨に光っているタラップを登り終える。後に続くおばさんは、雨で髪を水銀のように染めて荷物を両手に下げている。チラと地上のジープを探す。もう、ターミナルビルに入ろうとしているところだった。

デッキを突風が走る。甲板や船体に流れていた雨が吹き上げられる。風は身を切るように

冷たい。

やがてスピーカーから、どらの音が流される。関釜フェリーの事務所から、事務服を着た人達が寒そうに出て来ると、赤や黄の傘をさして立つ。作業服姿の人々も何人か立つ。蛍の光が流れ始める。彼等以外に、誰も見送る人はいなかった。

エンジンの音が大きくなり、身体が震わされる。船尾に白い波が立つ。思う間もなく、ずっとフェリーは岸を離れている。ほっとすると同時に、今ならまだ戻れる、という考えが起った。なぜか、化粧をした若い時のお袋の顔が浮かぶ。しかし目の前には、雨にけぶる低い家並みの、日本の風景があるばかりだった。

船内は空いている感じだった。多くは韓国人のおじさんやおばさん達で、あっちこっちの枡席では煙草の煙が上がり、笑い声がこぼれている。中野佳子は隅の枡から、もの珍し気にそれらを見ていた。隣の枡ではヒッチハイカー風の、アメリカ人らしい数人が小声で何やら話をしている。

何かの拍子に、思い出すでもなく、思い出し続けている自分に気がつく。少し腹が立つ

が、同時にせつない。彼女は嫌な記憶を振り払うかのように、天井を見上げた。いつも週刊誌だけを持って、あの人は新幹線のプラットホームを走っていた。そんな彼の姿を見る度に笑みがこぼれた。しかし今は、彼の笑顔を思い出す度に、疲れを感じる。

佳子は肩をすくめた。唇に力が入っているのに気づく。しっかりしなきゃ、と頭で自分に言い聞かせる。四角く大きな船窓から、寒そうに動いている風景が見えた。

彼女はスニーカーを履いて、揺れる通路を歩く。客室を出ると船の構造図を貼ってある空間に出る。扉は開けられたままで、冷たい風が平気で入り込んでいた。よろけながら甲板に足を踏み出すと、潮風が頬を引き締める。

目の前に低い山並があった。雨雲は山の頂を隠す所まで降りて来ている。谷に沿って、平地へと這っている雲もある。

フェリーは静かに進んでいる。目の前の小さな貨物船は、道を避けるかのようにのんびりと浮かんでいる。佳子の十メートル程先のデッキに、幼さの残った若者が寒そうに立っていた。異様な感じを受けた。景色を見ているようではない。それはまるで、山の中や雲の中に隠されている、何かと対決しているかのように見えた。

パーマをかけた髪は、濡れて重そうに黒光りしている。頬は少しこけ、心なしか蒼白かった。薄いブルーのジャンパーを着ていた。首のところが止められるようになっていた。着た。ジーパンを穿き、皮のロングブーツを履いている。若者が首を巡らし、瞬時目が合う。微弱だが、しかし確かに脳の表面を何かが走った。佳子はそれを、自分の気の弱さ、人恋しさだと捉えた。二人の目はすれ違った。

朴英浩は女から離れた目を、再び九州の山に戻す。谷を這い降りて来る雲が、立ち上る煙に思えて仕方がなかった。

彼は頂に立っている。四方には強い傾斜の山が濃い緑に包まれている。山の底を細いアスファルトの道がうねうねと続き、四角い敷地の火葬場で行き止まっていた。涙を袖で拭いながら、英浩はうずくまって見下している。やがて一筋の煙が上る。自分より高く上った時、空を見上げて彼は吠えた。それは正しく吠えたのであり、声は意味を持った言葉ではなかった。

正大は、死ぬ必要のない奴だった。慶子だって同じだ。朝鮮人じゃなかったら、二人は絶

対に死んでないと思う。そうとしか思えないから、死んだ二人が哀れで仕方がなかった。怒りの持って行き場がないままに、その日、彼はナナハンを駆って一人で首都高速を暴走した。未明に家に戻った。それでもまだ、腕は怒りに震えていた。そして怒りの多くは、友を見捨てたままのうのうと生きながらえている、自分自身に向けられていた。

中野佳子は寒さに肩を撫でた。風はトレーナーのぶ厚い生地を突き抜けて肌に感じられる。船内に戻ると空気の悪いのがわかる。自動販売機で缶コーラを買うと、自分の場所へ向った。目は船内の人々をせわしく見ている。そして無意識の内に、あの人を探している。そわそわとして落ち着かず、無性に人恋しいのに、そのくせ一人でいたかった。人の声がなつかしいと同時に、楽しそうな笑い声は気分をいらつかせた。口中に弾けるコーラが気分を引き締めてくれる。しかし二口めは、もはや刺激に慣れて、何の感動も引き起こしてくれなかった。

在頭あたまの肩間には、縦に深い皺が刻まれていた。

「僕は君が思っているほど立派な男でもないし、強い男でもないんだ。」

彼は投げ捨てるように言うと、右手のパンチで左の掌を打った。

「君には解らないさ。日本人の君には解るもんか。」

と、獣のような目で見える。その時なぜか、初めてキスをした時のことを思い出していた。冬の人氣のない公園で、二人の吐く白い息がからまったか、と思った次の瞬間、唇は、冷たいけれど生きているもう一つの唇に触れていた。その感触がいつまでも生々しい。初めてベッドを共にした時の事は忘れ勝ちなのに、あの時の唇の感触だけはいつまでも消えない。むしろ時とともに、鮮かにさえなっていくようだ。

急に起こった人々の声で、佳子は通路を見た。缶の中のコーラの重みが感じられた。ゴルフへ行くようなスタイルの男達が、どれも似たように出始めた腹を揺らせている。

「おい、ここ空いとるぞ。」

と、中央の船首よりの枡を指す。どうやら後尾客室の方は、枡が塞がっているようだ。浮き浮きしている一人が佳子の枡へ来る。

「こっちも空いとうぞ。こっちのがええくさ。」

そして佳子を見、少しどぎまぎして、

「空いているでしょ。良いですか。どうも。おうい、来いよ。」

男達は四人だった。ふらつきながら靴を脱ぐと、小さな紙包みからウイスキーを取り出し、つまみを取り出す。せわしく煙草に火を着ける間も、話すのをやめない。

「久留米カントリーのコンペの時くさ。加藤の奴は、一メートルのバットで三つも叩くんやもんね。三つもやるっちゃあ、あいつぐらいのもんくさ。」

交互にちら、ちらと佳子を観察する。下らない男達だな、と彼女は旅行用の大きなナイロンバッグから、韓国の旅行案内書を取り出す。

アンニョンハシムニカ——こんにちは。コマップスムニダ——ありがとう。モドゥ・オルマムニカ——全部でいくらですか。ナムン・イルボン・エソ・ワッスムニダ——私は日本から来ました。

彼女は何度も読んだ説明文を再び読んでいく。韓国は美しくて歴史の古い国だ。どうしてこの国の人間であることが重荷なのだろうか。在韓の苦悩。そして日本人とは結婚させないという彼の両親の思考。また、血が穢れると激怒した自分の伯父。佳子には理解できなかった。

山陽線を各駅停車で下って来たのは正解だったと思う。中国山地を見上げ、瀬戸内海のさざ波の反射を見ながら、そして地方のおじさんやおばさん、高校生達のざわめきの中で自分の気持ちを整理し、考える事ができた。まだ不安定な気持ちは収まらないし良く解らないけれど、家を出た時のような悲壮感はかなり薄れている。

在頭は将来の事を話題にしたがらなかった。話し始めると、途端に見すばらしい面を見せることが多かった。彼は、私との結婚が許されないことを初めから知っていたに違いない、と思う。それなのに私を……。それだったらなぜ。……遊んだ、という言葉を彼女は忌避した。

佳子は高校を卒業すると同時に相互銀行へ就職した。島田在頭は、鉄鋼所の部長であり、社長の息子であった。銀行へは、よく来ていた。アメリカン・フットボールをしていた彼は、大股で颯爽と歩いた。自分の仕事に誇りを持っている事が窺われ、好感が持てた。

彼が韓国人だという事は、島田鉄鋼の社長を見れば解ることだし、本名で預金された定期預金や印鑑証明書もあったから自然な事として知っていた。嫌悪感はなかった。小さい時には、近所にそういう人達の部落があったし、同級生にも朝鮮人はいた。神戸という土地で育

ったのは、それなりに幸いだったと思う。だから何度目かのデートの時に、彼が真剣な顔をして自分は韓国人なんだと告白めいた言い方をしたことに、却ってショックを感じてしまった。告白なんて、この人には似合わないと思った。

だが、佳子は待った。十九歳から二十四歳になるまでの五年間を彼と共に過した。そして結果として、別れが突然にやって来た。

在頭は他人の言いなりになる人ではなかった。群をなさなければ何もできない、という人でもなかった。彼は独立心が強く積極果敢な人だった。そんな彼が……きっと両親を説得するからと言っていた彼が、遂には親の言いなりになってしまった。その言葉の底には、韓国人なんかと結婚しちゃダメだ、というニュアンスが感じられた。韓国人だとして駄目なのか、訳が解らなかった。すると、日本人とはダメなんだ、と言い直された。やっぱり解らなかった。解らないままに疲れがたまり、疲れ切ってしまった。そうして何が何だか解らないままに、結局は諦めた。すると無性に、韓国へ行ってみたい、この目で確かめたい、と感ずるようになった。清算しなければ、自分はこのさき生きて行けないだろうという予感が、強く心の底にひっかかっていた。

「ねえ彼女。ねえったら。」

先程から呼ばれていたらしい。佳子はふっと男達の方へ顔を上げた。船の揺れにこぼさないように、缶ビールが示されている。

「飲まない？」

「一緒にやろうよ。」

あわてて、

「あ、いえ結構です。」

と言いながら、笑顔になっている自分を嫌悪する。これも職業病なのか。それとも育ちなのか。女だからか。相手を嫌な人間だと思っても、笑顔を振舞った上で優しく断わろうとしてしまう。本当は、今は不機嫌な顔をしていたいのに。思い切り悪態をついてやりたいと思うのに。

「いいじゃない。長い旅なんだからさ。」

「ちょっとだけ。ちょっと。」

赤ら顔の男達に不気味さを感じる。少し、しつこ過ぎる。

「さあ、遠慮せずに。」

「これも何かの縁だよ。」

視線に犯されている、と佳子は感じた。

船内は蛍光灯に明か明かと照されている。反対側の窓からは、闇に入ろうとしている外界が見える。その窓に、しづきが時々風とともにぶつかる。揺れは更に激しさを増して来たようだった。

2

寒さのために体は縮み、関節も固く凍りついたように感じる。突風に引きちぎられた海水が、時々英浩にかかる。ジーンは濡れ、薄闇の中で黒く見える。体は小刻みに震え始めていた。寒さも今では、痛いを通り越している。命の危険は感じていたが、それもなんだか快感のように思われた。時々、意識がぼやける。フェリーが大きく揺れて、体が崩れそうになった。が、直ぐに凍りつくように冷たい海水が頬を叩く。